

## 傘

仲白針平

その町に着いて通りに出てみると、誰もが傘を差して歩いていた。しかし、雨は降っていないかった。日除けのためだろうかと考えたが、空は曇っていて、とくべつ日射しが強いわけでもない。彼は、自分だけ傘を差していないことに、不安をいだきはじめた。空を見上げると、二羽の黒い鳥が建物の向こうに飛び去っていくのが見えた。傘は色とりどりで、どれも骨組みのしっかりした、丈夫そうなものに見えた。彼は、自分もともかくどこかで傘を手に入れなければならないと考えた。傘のない人間は、ここでは目立ちすぎるのだ。

鮮やかな深緑色の傘を差した女が、通りの角にひとり突っ立っていた。車待ちでもしているのだろうか。さりげなく彼は女の横に近づいていった。

素敵な傘ですね、と彼は言った。

発した声が思ったほど優しそうでなかった気がして、彼は自分の声に影響され、少し顔をこわばらせた。女は何も答えずに、ちよこつと傘を傾け、彼の顔を横目で見ると、また視線を前方へ戻した。女は思ったほど若くもなく、かといって歳をとっているわけでもない。顔に刻まれた皺は、年齢とともに深くなってきたわけではなく、生まれつきそこに刻まれていたものようだった。その顔も、いまや傘によって隠されてしまった。

ホテルに行くには、バスかタクシーに乗らなければならなかった。彼はバスに乗ったのだが、当然ながら、車内で傘を差している者はひとりもおらず、彼もいくらかは馴染んでいるようだったが、誰もが手に傘を持ったままだったから、そのことが彼を窮屈にさせていた。

ホテルに着いてチェックインを済ませたとき、彼はフロントでたずねてみた。

「この辺で、傘を売っているところって、どこありませんかね」

すると、フロント係はあからさまに眉を顰め、無言のまま首を振り、彼

を非難するような目で追いやった。彼は、そんな対応をされるとは夢にも思っていなかったので心底驚き、しかし周りの誰もが彼に変な目を向けるので、苦情を言うわけにもいかず、そのまま部屋に引っ込んだ。

とにかく、傘を買わなければならぬ。この思いはいま、一段と切迫して彼の胸を締めつけるのだった。窓から見下ろすと、通りを行き交う赤や紺、そして黒や水色などの傘が目に入った。しばらく彼はその傘たちを観察していたが、いつまで見ている面白くないことなど何もなく、何の情報もそこから得られなかったため、彼は通りを見下ろすのをやめた。

ふと思いついて、彼は自分のキャリーバッグを開けた。どこかに折りたたみ傘をしまっただけであつたような気がしたのだ。ところが、折りたたみ傘はどこにも見当たらなかった。何をおれは焦っているのだろう、と彼は思った。ここへ来るまでも、おれが傘を差していないからといって、誰にも文句を言われたわけではないし、警察が寄ってくるわけでもなかったじゃないか。なければならぬで、べつに人に迷惑をかけるものでもない。それに、どうしてあなたは傘を差していないんですかと質問されることもなさそうだった。もっと堂々としていればいいんだ。彼は、そう自分に言い聞かせた。

午後の商談は可もなく不可もなくまとまった。部屋に戻ると、彼はEメールで本社に簡単な報告と資料をいくつか送信した。この町の奇妙な風習について、それとなく伝えてみようかと考えたが、また帰ってから話せばいいことだと思ひなおしてやめた。

彼は重荷が下りたように、だいぶ気分が良くなっていたので、外で夕飯を食べようと思ひ、ホテルから出た。もう暗くなっている、気温も下がりが、少し肌寒さを感じた。さすがに夜には誰も傘を差してはいないのではないかという思ひは、すぐに裏切られた。昼間と何も変わらず、人々は傘を差して歩いていた。彼らが傘を差している光景も見慣れてきたせいかな、この町に来たばかりのときみたいな不安にとられることはなかった。

彼は大通りから外れたあと、川岸の通りを長い間歩き、雰囲気の良い小さな店を見つけると、そこに入った。給仕は彼を見ると、微笑みの奥で、微かに日が翳ったような戸惑いの色を浮かべたが、すぐに席へ案内した。

何かワインを持ってきてくれるよう頼み、彼はため息をついて周りを見回した。まばらに客が入っているようだった。店も、人々も、何ひとつ変わったようなところは見当たらなかった。彼にしても、腹を満たしたことで気分がやわらぎ、商談のことや、帰ってからのことを検討する余裕ができてきた。それから当たり前のように、彼の意識は、また傘のことに舞い戻ってくるのだった。それにしても、連中の傘のことだけは不可解だ、と彼は思った。何か、それについて話したりすることも禁忌になっている感じがある。いったい何が起きているのだ。どういうことなのか、さっぱりわけがわからない……。

会計を済ませ、彼は通りへ出た。さっきよりもさらに冷えてきたようだった。彼は、やはり傘をどうしても手に入れなければならないのだという思いに取り憑かれていた。つまり、自分も傘を差してみないかぎりは、傘の秘密が解明できないのではないか、実際にみんなと同じことをしてみること、その理由が理解できるのではないかとこの考えもあったのだ。

彼は、いまや傘を渴望していた。喉から手が出るほど、それが欲しかった。ホテルへの道を迂回し、手当たり次第に通りをうろついてみたが、多くの店はすでに閉まり、やっているところでも傘を置いてそうな店はなかなか見つからなかった。傘というものがどんなところに売っているのかを、これほど真剣に考えたことは、いままでの彼の人生になかった。

ずいぶん歩いたが、傘を売っている店はどこにもなかった。彼は再び、勇気を出して誰かに聞いてみるべきだと思った。今朝のように、通行人にいきなり話しかけるのはうまいやり方ではない気がする。それは警戒されてしまう可能性が高いと思った。浮浪者のような人種がいまいかと探して歩いたが、それも無駄に終わった。

交番を探してみようか？　だが、なんとなくそれは避けたいと思った。傘を探しているなんてことを告白するのが、なぜだか後ろめたかった。

いきなり後ろから肩を叩かれて、彼は予期せぬ危機に身構える獣のように体を硬直させた。振り向くと、傘を差したひとりの男が立っていた。

「驚かせて失礼。旅行の方ですか？」と低い声で男が言った。

彼は不意打ちをくらい、言葉がうまく出てこなかった。

「いかがですかね。気に入ってもらえると思いますが」と男は続けて話した。

男はコートのポケットから何かを取り出すと、傘を肩で支えて、取り出したものを周囲から隠すようにして彼に見えるように広げた。何枚かの女の写真だった。

彼はまったくそんな気はなかったが、値段の交渉をしたいと言って、男のあとについていった。男はすぐそばの建物の入り口から入り、狭くて暗い階段を昇った。そこからひとつの部屋に入ると、中にもうひとり男が座っていて、彼に丁寧に説明をした。はっきり言って値段は高かったが、彼はそれでかまわないと言い、別の待合室のようなところに連れて行かれた。部屋は狭くて、煙草の臭いが染みつき、薄汚かった。中にいたもうひとりの客が一瞬目を上げ、彼のほうを見たが、興味なさそうに目をそらすと、手元の雑誌をぱらぱらとめくった。

しばらくすると、その客はどこかへ案内されていき、彼はひとり残された。机の上に、誰かの忘れ物か、客用に置いてあるのか知らないが、煙草がひと箱あった。普段煙草を吸うわけではないが、彼はなんとなく一本抜き取り、傍らに置かれていたマッチでそれに火をつけた。ゆっくりと吸い込み、ゆっくりと吐いた。

彼は部屋に呼ばれ、女の前で服を脱いだ。だが思いなおし、脱ぐ必要はなかったと言ってもう一度着た。女は不思議そうな顔をして彼を見ていた。ただ、話し相手がほしかっただけだと彼は女に言った。頼むから、このままここにいて、こちらに干渉するなどいい聞かせた。

彼は、戸惑う女をその場に置いたまま、部屋を出て廊下を歩き、あらかじめそうすると決められていたかのように、隣にあったもうひとつの扉を開けた。部屋の奥のベッドで裸の男女が抱き合っているのが見えた。彼は部屋を見回すと、部屋の右手の壁際に、靴や鞆と揃えて置かれていた傘を確認し、真っ直ぐそちらのほうへ向かった。男が、何だおまえは、と彼に向かつて声を放ったが、裸のためか間抜けな感じがした。彼は行動を止めることなく進行させ、片手で男の傘を掴むと出口のほうへすみやかに引き返した。背後で「やめろ」という声が聞こえたが、無視した。

彼はそのままもと来た通路を歩いて、受付の男の前を通り過ぎた。男は

彼のほうを見ていたが、何も言わなかった。そのあと立ち上がり、おそらく彼についた女がいるはずの部屋へ向かったらしかった。建物の通路に出ると、傘を手にした彼は、下りの階段をほとんど跳ぶようにして一気に駆け下り、表の通りへ出た。その間も、そしてそこから走り出した瞬間も、彼は自分の右手の中の傘の感触を強く意識していた。

彼は、ホテルと逆方向に走った。行人人の差す傘たちを避けながら、後ろを振り向くことなく必死で走った。途中、何度も傘にぶつかりそうになった。この町じゃ、人間が傘を差しているんじゃない、傘が人間をぶら下げて歩いているんだ、と彼は思った。

いつの間にか、彼は川沿いの道に来ていた。しかし、先ほど食事をした店がある場所とは違うエリアだということが分かった。彼は走る速度を落とし、早歩きくらいに切り替えて、息を整えようとした。そこではじめて後ろを振り返ってみたが、誰も彼を追ってくる者はいないみたいだった。彼は、自分の右手に握られた傘に目をやり、その感触をまた確かめていると、自分の内側から歓喜が湧き起こり、全身が輝かしい達成感に包まれるような気がした。

また少し速度を落とし、もう一度振り返ってみたが、どうやら何の問題もなさそうだった。彼は傘を開き、頭上にかざした。腕の角度や柄を握る強さなどをいろいろ試し、傘を肩に凭せ掛けたり、ちよつと前傾に差してみたり、左手に持ち替えたりした。右手で傘を持つと、傘の位置は自分の体の中心より少し右にずれ、体の左側が傘の下からはみ出すような感じがした。左手に持ち替えたとき、こんどは傘は、自分の体の中心より左にずれるため、体の右側が心許なかった。左手で傘を持ったまま、傘を右方向に傾け、自分の右肩のほうへ凭せ掛けた。なんとなく安定するような気がしたが、傘の角度が斜めになり、体の左側が少し露出している感覚があった。

彼は方向にかまわず歩き続けながら、傘のうまい差し方を研究した。右手で持ち、傘が中央にくるよう、手の位置を心臓のあたりに固定した。前傾させすぎず、肩に凭せ掛けもせず、なるべく傘が垂直になるように意識して差した。ところが、この差し方は、まず顔の前に傘の中軸がくるため

に邪魔で、なんとなく背中が傘の外にはみ出しているようで落ち着かなかった。

彼はいまやひとつの理解に達していた。

ようするに傘ってやつは、どう差したって、体のどこかがいつもはみ出すようにできてるんだ。これは厳然たる事実だ。傘の軸が傘の中心にある限り、人間はいつまでたっても傘の中心にいけないうってことさ。もちろん、頭の上に乗っけるように差すなら中心に入る。だが、それでは体がまるごととはみ出ているようなものだ。構造上、傘は決して上手に差せないようにできているんだ。なんだってみんなあんなふうに、自由に屈託なく傘を差していられるんだろう。

そんなことを考えながらも、彼は傘を差して、ときどき持ち替えたりしながら歩き回った。

もしかすると、この町では、住民一人ひとりに一本ずつ傘が割り当てられ、誰かの傘はその人に固有の、何か個人的な身分を証明するものなのかもしれない。たとえば、パスポートや免許証のように。でもそれは馬鹿げた考えだった。あるいは、この町にあるべき傘の総数が決まっているなんてことがあるかもしれない。そう、やはり一人一本ずつ所有するという決まりがあつて、それ以上でもそれ以下でもない。誰かの傘が壊れたら、その人のためだけに、ただ一箇所しかない専門店か修繕所のようなところで直してもらうか、新しいのをひとつ配給してもらう。傘を管理する役場みたいなものだろう。だから、ここではどこにも傘を売っていないのだ。そうであるなら、と彼は考えた。いま、この小さな町では傘がひとつ足りないことになる……。

あの男はどうしただろう。警察に届けただろうか。彼と同じように、違う誰かの傘を奪ったかもしれない。傘の奪い合いや窃盗が連鎖して、町中が傘の争奪戦になるところを彼は思い浮かべた。いずれにせよ、彼がいま傘を所持していることは、不当なことであり、危険なことでもあるという気がした。

彼は、傘を持っていることが急に怖くなった。だが、いまさら捨てるわけにもいかない。傘のおかげで顔を隠せるのも都合がいい。早いところ、ホテルに帰りついてしまいたかった。しかしフロント係は、彼が傘を持っ

ていることを不審に思うに違いない。彼は次第に、自分が馬鹿な真似をしたものだと思いはじめていた。傘を安全に捨てることができるだろうか。川は？ しかし捨てる場所を誰かに見られる危険性がある。その辺の暗い物陰に、さりげなく立て掛けて立ち去るといふのはどうだろうか。

思案したあげく、彼には自分が傘を捨てられないだろうということが分かった。傘は、もうすっかり彼のの一部になっていると言えなくはないが、何より傘を差していると気分が安らいだ。もっと上手に傘を差したいと思ったし、不思議なことだが、だんだん傘を差す手の疲労も緩和されてきて、本当に傘にぶら下がって彼の代わりに傘が歩いてくれているような感じがあった。その感覚は、雲が彼を運んでくれているような、心地よいものだった。彼は傘を持って幸福だった。だからこれは捨てないことに決めた。

夢見心地のまま歩いていると、街灯の下で、急に彼は誰かに呼び止められた。なんとなく、少し前から、話しかけるタイミングをうかがっていたような気配があった。傘を傾け、横目でちらっと見ると、見知らぬ男の狼狽えたような顔があった。その男は傘を差しておらず、手にも持っていないかった。彼が傘を盗んだ相手でもなかった。

素敵な傘ですね、と男は言った。

男は緊張のせいか、自分の声が思ったより震えていたのだろう、ますます顔をこわばらせ、オレンジ色の街灯の明かりに照らされた顔は青ざめているように見えた。

彼はもう一度男を見てから、視線を前方に戻すと、傘の位置を整えて再び歩きはじめた。〈了〉